仏教の思想 11

古仏のまねび〈道元〉

仏教の思想

11

古仏のまねび〈道元〉

高崎直道
梅原　猛

責任編集
塚本善隆
増谷文雄
梶山雄一
上山春平
梅原　猛

高崎直道（たかさきじきどう）

大正一五年、東京に生まれる。東京大学文学部インド哲学科卒。専攻はインド仏教学。駒沢大学助教授を経て、現在、大阪大学助教授。

〔主著〕『宝性論の研究』（英文）『仏教史概説インド編』（共著）など。

梅原猛（うめはらたけし）

大正一四年、仙台市に生まれる。京都大学文学部哲学科卒。第三回仏教伝道文化賞受賞。

〔主著〕『美と宗教の発見』『仏像―心とかたち（共著）』『地獄の思想』『仏像に想う（共著）』『羅漢』『哲学する心』など。

仏教の思想 11　　古仏のまねび〈道元〉

昭和44年5月30日　初版発行
昭和44年9月1日　再版発行

著作者　高崎直道　梅原猛
発行者　角川源義
印刷者　中内あき子

発行所　株式会社 角川書店（かどかわしょてん）
東京都千代田区富士見2―13　〒195208
TEL. 東京(265)7111〈大代表〉　〒102

落丁・乱丁本はお取替えします　　中光印刷・鈴木製本
Printed in Japan

道元像　宝慶寺蔵　鎌倉時代

目次

はしがき　一

第一部　無窮の仏行　高崎　直道　九

序章　禅と思想　二

一章　道元の生涯　一八

1　おいたち　一八
2　出　家　二七
3　入　宋　三五
4　身心脱落　四三

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

5 法を弘めて衆生を救う　五八

二章　仏法の正伝　五四

1 仏道をならう　五四
2 正法眼蔵とはなにか　五九
3 正伝の仏法と禅宗　八八
4 正伝の方法　九九
5 求道の徹底を期する　一〇九
6 仏の行にきわみはない　一二四

三章　現成公案　一三七

1 「法」の体系　一三七
2 現成公案とはなにか　一三四
3 起ということ　一四六
4 縁ということ　一五五
5 自然も真理を表現する　一六八

むすび　一七

第二部　『正法眼蔵』の背景〈対談〉　高崎直道・梅原猛　一八一

第三部　道元の人生と思想　梅原猛　二一二

一章　アウトサイダー道元　二一五

二章　倫理と神秘とのあいだ　二三三

注　二五〇

道元著作一覧　二九五

参考文献　二九九

日本仏教史年表　三〇二

禅宗法系図　三〇八

はしがき

道元は今まで私にとって、あまりに崇高すぎる人間であった。宗門によって、神に祭り上げられた聖僧道元の姿については、いうまでもない。こういう聖僧道元に反撥(はんぱつ)して、和辻哲郎博士が、『沙門道元』を書いたときも、道元はやはり、あまりにも人格高潔、真理のために真理を求め、名利と愛欲を超脱したすぐれた宗教的人格としてえがかれたのである。

たしかに、道元はそのような人間であった。和辻博士の著書によって、道元は再び近代的な意味においても聖者として認められた。しかし、いったい聖者の中に何があるのか。どんな人間でも、生まれたときから聖なる人間であるわけではない。多くの場合聖なる人間の中には、彼をとりまく俗なるものとの必死の闘いがある。道元の場合、そのような闘いがなかったであろうか。彼の場合この俗なるものは、何であったろうか。

大久保道舟氏の『道元禅師伝の研究』は画期的な道元伝の研究といえよう。そこで今まで、霧の中にあった感のある道元の俗縁が、正確な資料にもとづくみごとな論証によってたしかめられた。それによれば彼の父は源通親(みちちか)、彼の母はかつて木曾義仲の妾であった松殿基房(もとふさ)の娘である。そして、この点について、その後の道元伝は、大久保説に従っている。もし父が源通親、母がかつて義仲の妾であった松殿基房の娘であるとしたら、道元は、復雑な家庭環境に生まれた子供であるといわねばならぬ。彼は、政治的な策謀と情欲がうずまく、宮廷政治の泥海の中から生まれたといえよう。

その生まれゆえ、彼は、名利の欲や、愛欲に強い嫌悪をもったのではないか。

そう考えたとき、道元は私にとってかなり親しい人間となった。真の貴族は容易におのれの感情を表わさないものである。最高の貴族の出である道元は、親鸞のように、おのれの内にある業や、煩悩について語らなかった。しかし、語らなかったのは、そういうものが、彼の中に存在しなかったことを意味しないであろう。

蓮の花は泥の中から出て、実に清浄な花を咲かせるという。それが、大乗仏教の語った人間の比喩である。われわれは、このような教えを説く大乗経典を翻訳しつつ、泥の生活を送った羅什の人生をすでにこの全集第八巻『不安と欣求』〈中国浄土〉でみた。道元の場合、泥は全く存在しないようにみえる。しかし泥が全く存在しないとしたら、まさに道元という人間は大乗仏教的でなくなりはしないか。私は、道元を生んだもの、それはまさに泥中の泥であり、この泥中の泥との格闘が、比類なき聖僧道元を生んだのではないかと思う。こういう道元像は、多くの人に意外な感を与えるかもしれない。しかし、私はこの泥中の泥に咲く清浄無垢な蓮の花こそ、まさに、道元の生涯であり、そういう道元像こそ、もっとも大乗仏教的な道元像であると思う。

この書の第一部の著者高崎直道氏について、読者は、意外な感をもたれるかもしれない。なぜなら高崎氏は、インド哲学の学者であり、道元専門の学者ではないからである。われわれ編集者が辞退する高崎氏に、道元の巻の執筆を懇願したのは、道元の思想を、仏教思想全体の中で、広く見渡す視点を高崎氏に期待したからである。この編集者の意図は成功したといえる。道元の中には、華厳的なもの、唯識的なもの、さまざまなものがあり、大乗仏教の思想の一つの集大成がここにある

ことが、高崎氏の分析により、確かめられた感があるからである。

なお、高崎氏の出された説のうちで、もっとも重要な説は、「心塵脱落」の説であろう。道元が「身心脱落」というのは、如浄が、「心塵脱落」といったのを聞きちがえたのではないかという説である。この説はもちろん従来、何人によっても提出されなかった新説であり、もしも、それが道元の聞きちがいであるとすれば、彼は聞きちがいにより新しい思想を創り出したといえる。

高崎氏もいわれるように、道元の『正法眼蔵』には、強引な読み方、強引な解釈が多い。漢文の読み方としては、たぶん誤りであろう。その意味で、彼は誤読・誤解の天才であるといえるが、「身心脱落」も、また彼の一生一代の独創的な誤解であるかもしれない。高崎氏は、この仮説を、やや、遠慮がちに提出されるが、この仮説について、広く識者の意見を聞きたいと思う。

道元の哲学については、いろいろ語られた。とにかく、『正法眼蔵』という本は、異常な魅力をもった本であるといえる。多くの哲学者が、この本に魅せられて、道元の哲学について語った。和辻哲郎博士の『沙門道元』、田辺元博士の『正法眼蔵の哲学私観』をはじめ、哲学者によって語られた道元にかんする著書は多い。たしかに、われわれ日本人が『正法眼蔵』というみごとな思想書をもったことは、驚異であると同時に誇りである。そこには、現代哲学が、はじめて語り出したような深い思弁を含んだことばが、玉のようにちりばめられている。その一つの玉をとってきて、道元を、あるいは、人格主義の哲学者、あるいは、神秘主義の哲学者、あるいは、時間論の哲学者、あるいは、無常の哲学者に仕立てるのは、はなはだ興味深い哲学の仕事であろう。しかし、私は、いくつかの道元の思想にかんする研究を読んで、群盲象をなでるの感を深くした。多くの注釈者は、

彼のことばで、道元のことばを注釈しているが、注釈している文章が、道元の文章の前にあって、あまりにみじめすぎるのである。道元の文章は、いかなる哲学者のいかなる注釈よりも、もっと深い意味を含蓄しているように思われる。道元は、『正法眼蔵』の「海印三昧」の中で、「深々海底行なり」ということばをつかっている。深い深い海の中から、彼は、みごとな宝玉をとり出して、われわれに示す。このことばの一つ一つには、底知れぬ深い海が宿っているような気がする。その真意をとらえるのは、全く容易ではない。

彼の『正法眼蔵』を前にして、私もまたここで、象をなでる一人の盲者であった。他日、もう少し、私も眼を開きたいと思う。この道元の深い思想が少しでもわかったと思うような恁麼(いんも)の時が私にも来てほしいと思うのである。宗門の人はそういう私の願いは、坐禅をせずには、みたされないというかもしれない。とにかく、道元の人間と思想の研究もまだこれからだと私は思う。

なお、この前の第七巻『無の探求』〈中国禅〉を書いたときから、この稿を書くときにあたって、私の運命に変動があった。それは、私が一五年間勤めた立命館大学を退職したことである。理由はいろいろある。しかし、このような「仏教の思想」という大きな仕事にとりくんだ私には、いたずらに学問以外の用事の多くなった大学にとどまっている暇がないということもその理由である。無常迅速、生死事大と道元はいう。うろうろしていると、人生はすぐ終わってしまう。

道元のように、俗務を離れて、ひたすら学道に精進すべきなのである。

一九六九年五月

梅原　猛

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

目次

はしがき　一

第一部　無窮の仏行　高崎　直道　九

序章　禅と思想　二

一章　道元の生涯　一八

1　おいたち　一八
2　出　家　二七
3　入　宋　三五
4　身心脱落　四三

5 法を弘めて衆生を救う　五八

二章　仏法の正伝　五四

1 仏道をならう　五四
2 正法眼蔵とはなにか　五九
3 正伝の仏法と禅宗　八八
4 正伝の方法　九九
5 求道の徹底を期する　一〇九
6 仏の行にきわみはない　一二四

三章　現成公案　一三七

1 「法」の体系　一三七
2 現成公案とはなにか　一三四
3 起ということ　一四六
4 縁ということ　一五五
5 自然も真理を表現する　一六八

むすび　一七

第二部　『正法眼蔵』の背景〈対談〉　高崎直道・梅原猛　一八一

第三部　道元の人生と思想　梅原猛　二一二

一章　アウトサイダー道元　二一五

二章　倫理と神秘とのあいだ　二三三

注　二五〇

道元著作一覧　二九五

参考文献　二九九

日本仏教史年表　三〇二

禅宗法系図　三〇八

第一部　無窮の仏行

坐禅像（駒沢大学蔵）

高崎　直道

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com